

# 教員の対話から考える保育者養成と多様性

## －【座談会】人との関係をどう構築するか－

林 恵 茂木 克浩 五十嵐 元子

## Teacher Dialogue: Exploring Early Childhood Educator Training and Diversity through Conversations

### －【Roundtable Discussion】Building Relationships with Others－

Megumi HAYASHI Katsuhiko MOGI Motoko IGARASHI

#### Abstract

This study explores themes that emerged through dialogues among educators in early childhood education training institutions, focusing on the complex relationship between educator training and the diversity of students. During the roundtable discussion, several key points were addressed. Firstly, it was noted that student evaluations from educators differ between assessments related to their proficiency as future educators and assessments of their personal qualities, potentially resulting in conflicting messages for many students, particularly those with diverse backgrounds. Regarding the formation of a group that embraces diverse students, it was emphasized that it goes beyond mere complementarity; instead, it involves recognizing and appreciating the inherent uniqueness of each individual and discovering the fascination in others. Additionally, the concept of "polishing completion" emerged during the dialogue, highlighting the need for an attitude that actively embraces diverse perspectives and acknowledges areas of deficiency. However, programs focusing on building relationships and cultivating the ability to recognize individuals, the foundation for embracing diversity, are currently absent from educator training curricula. This underscores the necessity of reevaluating how student diversity is perceived and encourages the exploration of new approaches within educator training programs.

#### Keywords:

Roundtable Discussion Student Diversity Dialogue Relationship Building

## 1. 目的と方法

### 1) 対談の目的

近年、組織や社会においてダイバーシティ&インクルージョン（D&I）の概念が注目を集めており、ジェンダーや人種、性的指向などの多様性を受け入れ、個々の多様な価値観や視点を活かすことが重視

され、組織が D&I を推進することで、創造性や生産性が向上し、関係する人の満足度も向上するとされている。保育現場においては、障がいがある子どもを含めた統合保育は 1970 年代頃から取り入れられてきたが、近年になって、インクルーシブ保育の考え方へと変化しつつある。そのようななかで、保育者養成校はどのような理念に基づいて対応をしたらよいのだろうか。

本稿は、多様性に関心を持つ保育者養成校の3人の教員が、自由に対話を進める中で、これから課題になると思われる事項をあぶりだそうとしたものである。

## 2) 対談の方法

対談に参加した3名の背景は以下のとおりである。

林：足利短期大学こども学科所属 専門は特別支援教育、保育の場におけるマイノリティについて研究を進めている。保健センターや児童相談所、特別支援学校での職を経て、保育者養成校に勤務。

茂木：足利短期大学こども学科所属 専門は美術教育、多元的共生社会の実現に向けて、美術教育ができることは何かを大きなテーマに研究を行っている。これまでにALS(筋萎縮性側索硬化症)当事者や性的マイノリティ当事者と協働で、美術科の授業題材を開発してきた。

五十嵐：白梅学園大学子ども学部所属・足利短期大学非常勤講師。専門は臨床発達心理学で、保育現場の巡回相談に携わりつつ、子どもや保育者との対話とインクルーシブ保育について研究を進めている。

対談はオンラインシステムを使用し、おおよそ120分間実施し、テーマと関連性のある部分のみを対象として扱った。

## 3) 対談から浮びあがったテーマ

連続した対話の中で以下のような項目が大きなテーマとして語られた。

1. 学生は授業の内容や教員からのかかわりで矛盾したメッセージを受け取り続けている可能性がある。
2. 多様性を認めあう集団の在り方は苦手を補完しあう形が最適解というわけではない。
3. 保育者になるにあたり、重要な部分は保育者養成のカリキュラムに明記されていない。
4. 感性を磨く。
5. 差異や不足を「面白い」と思えること。

## 2. 対談の内容

### 【矛盾したメッセージを受け取る学生たち】

〔林〕

特別支援教育やインクルーシブ保育の切り口に、社会構成主義<sup>1)\*1</sup>をベースに置くということを、五十嵐さんは意識していらっしゃるんですね。この話を進めるに当たり、おそらく私たちが重要な考え方だと思っている社会構成主義と保育士養成課程に在籍している学生のあるべき姿とは親和性が非常に低いと感じています。インクルーシブの話をしていても私自身が矛盾を抱えながら話をしていきます。

〔五十嵐〕

そうですね。資格を取るためにはこれはやっておかなきゃいけないっていうものが結構明確に基準があって、そこは私たちがどうこうできる問題でもない…何か大きく転換すればできるのかもしれないけど、そのどうこうできない部分と、資格取得に関係なく学生本来の姿を見たときに「面白い子だな」って思ったりする場合ってありますよね。その学生を応援したいっていうか。

〔林〕

勉強はできないけど、ちょっと面白い感性をもっているとかそういう感じでしょうか。

〔五十嵐〕

そうそう。例えば、物忘れするスケジュール管理もできない、書くのも難しいから、なかなか日誌も提出できないとか、ことあるごとに課題が浮き上がってくる。それらは養成校の中では、絶対アウトなことだけど、その学生自身を見てみると、子どもの見方が面白いなと思える部分があったり、自分が駄目なことをわかっているけど、何とか保育士になりたいという気持ちだけは強くて、何か訴えてくるような学生がいるんですね。そういう学生に出会ったときに、養成校のあり方って、資格を取らせることに対して、その子の人生とか、思いとか、そういうのに触れると、私たちはどうしたらいいのだろうかという迷いとか、戸惑いとかが生まれる。矛盾したメッセージをその学生に送っているんですね。そこにしんどくなるっていうか、「あなたのこういうところいいよね」「私はそういうところ、すごく気に入っているんだけど」って言いながらも、でも「ここはできていないから頑張れ頑張れ」って。日誌とか書けないものを、書かせようとするわけで、私たちにとっては、資格を取るためには、それをしなければいけないことだけれども、その学生が受け取るメッセージっていうのはものすごくアンビバレントものになりますよね。

〔林〕

「いけてるよいけてるよ」って言われながら「やっぱり駄目」って言っているっていう。そのアンビバレントさは、資格取得だけじゃなくて、何かおそらく人生のいろんな場面で、当然のことながら出てくるものだと思いますが、確かに養成校の中で、私たちは学生に矛盾があることをしています。

私たちが付き合う学生の多様性にどう対応するかと考えた時に、結局その「多様性＝私たちが困る」とか「戸惑う」という観点が中心となっている気がします。この前の乳幼児教育学会<sup>2)</sup>でも事例が出されましたが、やはり学習面や実習についていけない学生がいるという部分に関心が集まっていたように思います。

学生ももちろん私たちが想定しているルートに乗れなくて困っているのだけれども、私たちも相当困っていて、そうなる「多様性＝困ること」ということになっていないでしょうか。

〔五十嵐〕

多様性という言葉に色んな意味合いがあって、も

う少し俯瞰して見てみたら、困っているということだけではなく、色んな人がいると気づくのではないかと思います。むしろ、本当は多様じゃないのに、困っている理由が様々に見えて、それを多様性と呼んで学生個人の問題に帰結させてしまう。

〔林〕

多様性っていう言葉には、色々なタイプがあるはずなのだけど、私たちは一方的に多様性を固定的に定義しようとしていて、「私たちが困る」というキーワードがあるという感じでしょうか。困らないものは多様性ではないっていうことではないと思いますが。

〔五十嵐〕

困らないところでは問題が起きないから、見えないうつらさスルーしてただけ。でも本来そうではないですよね。

〔林〕

結局その多様性を語る時に困り感で語っているみたいな部分は往々にしてあるわけですね。その困り感っていうのは社会構成主義で言えば、結局周囲との関係の中から困り感が生まれてくることですね。その関係を構成するものは何かっていうことでしょうか。

〔五十嵐〕

この前の乳幼児教育学会（第33回）でも「多様な学生像」って、結局枠にはめてるわけですね。枠にはめて私たちがわかりやすいように分類しているのではないですか。

〔林〕

確かに、話題提供に取り上げる際にバランスを考えて人も選んでいます。例えば、外国人、性的マイノリティ、障害、といった具合に。

〔五十嵐〕

その分類、今まで取り上げてきたタイプは考えても5個とか6個ですね。これって多様ですか。

〔林〕

そうですね、言葉にする段階でもうカテゴリーに分けてラベリングしているわけですね。その事象を示す言葉がある限りラベリングはされますよね。確かに紹介される人たちは、元の期待される枠組みから外れているので選ばれています。

〔茂木〕

まさにそれは性の多様性にも共通の問題だなと思います。LGBTで言えば「色々な性のあり方を内包しています」というのが一般的な捉え方です。ただLGBTがそれぞれ「レズビアン」「ゲイ」「バイセクシャル」「トランスジェンダー」の頭文字をとっているからか、どうしてもそこにじっくりこない人もいます。ただ語ったり、研究したり、調査したりとかするとき、何か区切らないとやりづらいみたいなのがありますよね。区切らない状態で扱おうとすると難しい。

私は今、美術教育を通して性の多様性のことを考える題材開発を当事者と一緒にやったりしています。その前はALSの方と授業をやったりしていました。授業の中で生徒たちは真剣に考えます。ただ結局は

知識としては理解するけど、そのことだけを知って、それ以外の色々な人がいるんだってところまでつながらない。結局は、人の多様性じゃなくて、性の多様性やALSのことだけを知る授業になっているなと最近では思っています。自分ごととしてなかなか捉えさせられなくて、これでいいのかという疑問があります。知識を学ぶことも大切なのですが、もっと本質的な「色々な人がいていいじゃん」というような、それを大事にしようよってところにいかないのが悩みですね。ALSで障害のことやった、性の多様性のことやった、それじゃ次はどうする。妊婦さんとか高齢者とかを扱えばいい。みたいにしらみつぶしにやっていけばいいのかっていう疑問があります。もっと考えてもらいたいのは、それぞれのカテゴリーの理解ではなく、自分も含めて、みんなはみんな多様なんだってことです。ただそれをどうしていいか手詰まり感があります。

〔林〕

そうですね、私は保育者養成に6年間勤務し、その後、4年間特別支援学校に勤めて、また養成校に勤務しました。再び障害児保育を教えるとなったときに、強い違和感がありました。人をカテゴリーに分けた障害児保育の科目そのものをやる必要がないんじゃないかと。その人を理解しようとする姿勢が育っていなければ、障害児保育を教える意味がないのではないかと、その時は強く感じました。

つまり大切なことは障害の有無などは関係なく、人にどう注目して理解しようとするかということだけだと思ったわけです。

〔茂木〕

やっぱり資格取得をさせるから、何でもある程度の基準はクリアしないとイケないっていう難しさがありますよね。

ちょっと話が飛びますが、私は教員として働きながら修士課程へ行きましたが、元々学校の美術教育で協働学習は成立するのかっていう研究をしたかったです。大体美術って1人で黙々とやっているんですね。時々、意見交換したりとか、作品を見合ったりしますが、結局最後は個人で作品をつくる。ただ例えばデザインの世界は基本的にチームで動いて、成果を出していきます。アーティストの中にもボランティアを募って、その地域で作品づくりをしたり。1人で何かやるっていうことだけが美術じゃないですよね。それを学校教育でできないかと。私の指導教官は「すべてのことができなくてもいいと思わない？」って言うんです。アイデアが面白い生徒がいる。ただしそれを表現する技能がない。一方技能はすごいけどアイデアがイマイチの生徒もいる。この2人がタッグを組んでやったら面白い作品ができて、もうそれでいいんじゃないって。今の美術教育は全ての児童生徒に両方を求めるから、どちらかだけだと、どっちも評価されず、結果として美術が苦手な子になってしまう。これがチームだったら別にできないことがあってもいい。アイデアも出ない、描くのも苦手、でもこの2人を取りもつ潤滑油みたいなスキルがある生徒がいたらそれも生かせる。

全ての基準を超える、超えろってやっていたら、それはみんな嫌いになる。修士の2年目は経験者研修が重なっていて、その研修で一緒だった先生に、「できないことがあってもいいじゃないですか。チームで良さを生かしあって取り組めば」って話をしたら「全く理解できない」って言われちゃいましたね。今の養成校に求められているものって、そのときの構図に近いんだなって感じます。

実は超えられない部分とかあっても良いのかもしれないんですよ。私たちも「保育はチームです」とかって言うじゃないですか。だから本当は協働する力みたいなのが必要で、その結果、多様な人材がそれぞれの魅力を発揮できるといいんじゃないかなと思っています。

〔林〕

そうすると、第1に必要なものは人との繋がり方、そのチームの作り方とか、苦手なものがあったとしても補完できるような関係性をどう作っていくかっていうところに、注目することが重要だとなりますよね。

#### 【苦手を補完しあうわけではない】

〔五十嵐〕

今のお話聞いていて、「苦手を補完する」は違うかなと思いました。補完するということであれば、何か形が決まっていて、そこの中にはめ込むみたいなイメージになりませんか。1人1人の「持ち味」っていう言葉をあえて使いますが、全くどんな形になるかわからないけれども、持ち味が重なり合うことで、何かその人たちの形が出来上がってくるっていう、そんなイメージをもっています。むしろ、保育者養成のことに寄せれば、そういう経験を学生にしてほしいと思っています。

〔林〕

そうですね。自分のことも他の人のことも理解するというような、空気感を作っていくことだと思います。例えば「ペスタロッチを知る」ももちろん大事だけど、何よりも「自分を知る」とか「人を知る」とか「集団をどう作るか」みたいな、そういったことが大事だと。その理由に今の学生が総じてそういった感覚が不足しているように感じているからです。私たち教員もそれをどう変えていいのかがわからない。その雰囲気が変わればもっと学びも変わっていくんだろうと感じています。

そういうことって保育者養成のカリキュラムの中で、設定はされていないんですよね。厚労省が示しているように、科目に関する学びについては書いてあるけど、そういった内容は示されていない。そのあたりって他大学はどうしているんだろう。

〔五十嵐〕

白梅の学生たち見ていると、相当やっぱりそこら辺のやり取りが上手です。1年生のときから、色々な授業でグループワークをします。大学全体で様々な人とやり取りができるように戦略的にカリキュラムが設定されている。

〔林〕

補完するまでいなくても、違う人と一緒にやる場合に、学生が人の足りない部分をこういうふうにつまえているとか、人が長けている部分こういうふうにつまえているといったことに何か気がついたりしますか？

〔五十嵐〕

うちのゼミは、1人1人が結構個性的なので、一つのことをやるのにも3分と集中力がもたなくて、みんなでやろうって言ったことが崩れたりする時があります。でもそういうことだっていうのがもうみんながわかっているし、本人たちもそれを言います。そうすると、誰かが役割を提案したり、あるいは、「こういうところはみんなを私が盛り上げるね」みたいなことを本人たちから言ってみたりしますね。だから、お互いにわかり合って何かを補完するっていうのではなくて、やり取りしながら、今この場を楽しくするとか、何かやっていくにはどうしたらいいのかなっていうのを自分で考えて自分で言葉にしてみ、それで相手の反応を見ながらまた考えるみたいなことをするんだよね。そうやって何となく作り上げられてくっっていく。

#### 【《保育者養成で必要だがカリキュラムには組み込まれていない》】

〔林〕

それって相当高度なテクニックだと思いますが。多様性と保育者養成を考えるときに、色々な学生がいるのだけど、互いの関係づくりについては言及されていないんですよね。伝えるかどうかは教員に任されている。だけれども、保育者になるにあたって、人とどう関係を作っていくって人と自分をどう捉えるかっていうのは外せないってことですよね

〔五十嵐〕

それに気づいてないと思います。

茂木先生のさっきの例（できないことがあってもチームでよさを生かせればいいということが全く理解できないと言われたこと）じゃないけど、その人たちが当たり前だと思っている枠組みも、外から見たらもっと違った形になりえるということにも気づけない。我々教員が自分の枠組みを当たり前だと思わないようにしないと、この集団作りはできない。

〔茂木〕

はい、そうなんですよね。

〔林〕

それが一番大事なベースになりますよね。

おそらく養成校の教員の中ではその部分が大事だっていうのは今までも、言われてきていることだろうと思いますが。でも、それが俎上に上がってきた時代はあったのかな。それとも割と新しい課題で今の学生の特性、コロナ、ICTが進んだりのような時代の流れの中で、ことさら今になって強調しなければならなくなったことなのかな。

〔五十嵐〕

みんな気づいてついてない可能性が高いんじゃないかな。

〔林〕

気づいてない？！

《感性を磨く》

〔林〕

20年以上前、自分が保育者養成始めた頃に、養成校のベテラン先生が、「感性を磨かなきゃいけない」というようなことを強く言っていたのですが、当時若かった私は全くその意味が分かりませんでした。例えばミュージカルを見に行くと感動するとか綺麗な絵を見に美術館に行くとかそういう、直接的なことを提案していたので、余計わからなかったのかもかもしれません。今考えると、きっとその先生が言っていたことは、今我々が話し合っているようなことと、実は通じているのではないかと思ひ出しました。

〔茂木〕

私が中学の教員だった時、3年生最後の授業で話していたのは、結局人なんて、みんなバラバラで、血を分けた家族もそうで。平田オリザが、人ってお互いのことがわからない存在だって言っている<sup>2)</sup>。私も人のことはわかんないし、私たちはわかり会えないんだよね。でも、そんなわかりあえない人たちが、どうにかわかりあいたいなって思う生き物だから「ちょっとこれ美味しいから食べてみて」って紹介したり、それでそれを食べた人が「美味しいね」って言うてくれたら嬉しいし。それこそ SNS とかでも「これ見て素敵でしょ」って画像共有して、それに「素敵ね」って反応してくれたら嬉しいし。これって多分、私たちが別々だからだよって話をしていました。そんなバラバラな人間が、わかりあうって感じを味わうのには、やっぱ表現するって必要なんだよ。共有して、一緒に経験するってことがすごく必要だと。

もし私たちがみんな一緒だったら、多分誰も SNS で発信しないし、一緒に食事をしたり映画も見に行ったりしないよね。なぜなら、もう人が何を感じているかわかってしまうから、表す必要ないじゃんって話をしていました。これは別に学生だけじゃないのかもしれないけど、わかってもらえるのが当たり前というか、みんなこういうときは同じこと考えているでしょって前提の中で人と関わっていて。だから自分の思いと違うことが分かったら摩擦が起きる。中にはそれを言えなくて、自分の中にストレスを抱える。中には「何この子？」みたいになって、人間関係がギクシャクする。そこでやっぱり関わってくるのが、その感性なのかな。「私はこう思った」みたいなのがもてて、それを伝えあうとみんな捉え方って結構別々なんだってという感じ。

〔林〕

別々なんだってところが大前提にあるべきだよ。だからこそわかり合うのが難しい、その前提に立って、わかり合おう、わかりあうにはどうしたらいいかを考える。わかり合うには、ある程度のエネルギーを注ぎこもうとすることが必要だとか。

〔茂木〕

そうなんです。私はたまに「わかり合えないって前提で生活した方が気楽だよ」って学生に話し

ています。色々やったけど結局あの人とうまくいかなかったってなった時も、わかりあえないことが前提だったら、自分の心をケアできる。「うん。まーしょうがないか」って言える。わかり合えている前提だと、ズレた時にすごいストレスかかるし、辛くなっちゃう。その結果、相手を責めたり自分を責めたりする。こういう理由で、傷ついている学生もいるのかなって思っています。

〔林〕

わかり合えない前提にしながら、わかろうとしていたら、意外に一緒に思いだったり、こうだったのかと腑に落ちたりする、それが嬉しい。もしずっとわかり合うのは難しくてわかり合えないって経験だけだったら、多分自分のカテゴリーだけで生きていった方が楽なので、多様性とは逆の自分のグループの中で生きていくってことを選べばいいだろうと思う。

〔五十嵐〕

今茂木先生が話していたことって、対話の理論だなって思っていて、他者に対する向き合い方をどうするのかって話。なるほど要するに、他者性っていうのかな、私たちが「わかった」「わかり合えない」っていうことは、理解し得ない部分がたくさん他者にはあって、興味関心を持てるかどうか。その違いがあったとしても、繋がれる根底にあるもの何だろうかと最近思っています。その興味関心があれば、それは嬉しいから、もっと繋がれる。

グループの関係性が固定化していくと、今度はそこから排除される、わかり合えないことへの恐怖みたいなのが出てくる。わかり合えないことを前提にと言っていたけれど、他者は自分がもっていない何かや、自分が知らない何かを知っている、そういう何かがあるんだって興味関心をもっていうことなのかな。

〔林〕

そこを知りたいって思えるモチベーションがあるっていう。

〔五十嵐〕

「面白いよね」みたいなところに何かがありそう。

【キーワード：面白い】

〔茂木〕

それありますね。面白いな。まさにうちの息子の様子<sup>※3</sup>とかを見てると、すごく面白いです。自分自身の経験や他の子どもと関わってみてきた様子と違う部分があります。うん。それが面白いんですよ。美術の授業でも「これ面白いって」っていうのがあるんです。評価を出すときの基準とは違う時もあるって「君のやっていることって、ここで求めている基準とは違うけど、面白いよ」があるんです。しっかりきますね。人って本当面白いんだよってのが。

〔林〕

「面白い」は、興味深いとか感心するとか、あるいは謎をかけられて謎解きがそこに生まれているとか。それができると、例えばそれこそ保育者として、いわゆる私たちが想像するような、保育者の

規定レベルに届かなくても、「いやいや面白いんだよ、本当に面白いやつなんだよ」みたいな感じで、もしかしたら、補完せずにそのままいられるかな。補完すると面白くななくなっちゃうから。

〔五十嵐〕

うん、そう、そうなんだよ。うん。

〔茂木〕

面白い人がいたら、その面白さに気づいている周りの人間が「あの面白さをどう生かすべきか？」って動けるといいのかも。面白さに気づいた人が、本人は絶対表に出ようとしてこないけど「みんなの前で見たいから、是非やってもらいましょう！」とか「一緒にやろうよ！」ってうまく促すみたいな。それができてきたら、人の面白さを生かせるかな。

〔五十嵐〕

どうしたらいいんだろうっていう回答は求めなくてもいいのかもしれないけれども、この3人で話をして、この言葉を見つけられたっていうのは、結構大きいことだと思って思う。

〔林〕

感性みたいな話が出てきたけど、どうでしょう。

〔茂木〕

感性って言葉で説明するのが難しいんですよね。美術は「感性を豊かにして」って学習指導要領にも書いてあって、よく出てくるんです。私もずっと感性ってなんだって思っていました。感性とかって辞書で調べても分かりにくい。知性、悟性、理性の対義語みたいな説明があったり。それらと一緒に頑張って働くから、どれも大切みたいな。ただこれだとよくわからないので、私は授業で学生たちに写真撮ってきてもらっています。一週間の中で一番心が動いたモノやコトの写真を撮ってきていう課題を出しています。それは美味しいものでもいいし、綺麗な風景でも何でもいいから、1枚いいなと思った写真撮って。そうやって全員から提出してもらったのを見せながら、感性ってこれだよって説明しています。何か理由があって心が動いた感覚、心が何かときめいたような感覚、それが感性ですって教えています。

多分感性だけで動く、自分の欲望のまま「これが食べたいから食べちゃえ」「行きたいから行っちゃえ」「この人が好きだから抱きついちゃえ」みたいなになっちゃうので、そうならないように知性、悟性、理性を使って、制御しているんだと思います。多分補い合っている感じですかね。

感性を豊かにするというのは、そのときめくアンテナを広げることだと教えています。保育者になるのに「これ素敵じゃん」「これ面白いじゃん」ってたくさん思える人になってほしい。やっぱりここにも面白いが入りますね。

〔五十嵐〕

面白い。

〔茂木〕

面白いです。

〔林〕

面白いっていう言葉でいいんだよ

〔茂木〕

多分。それでいいんだと思います。

〔林〕

違いを面白いと思える面白さ、互いの面白さを活かすということですよ。

〔五十嵐〕

互いの面白さが、生きるんだよ。活かすではないと私は思っています。生きる。

〔林〕

この面白さが生きるような、空間というか。

〔茂木〕

多分、厳密に言ったら、この面白さを戦略的に生かしている場面も出てくると思うんですよ。

これをどうやって世の中に出したらいいとか。芸能人とかユーチューバーとかも、周りが面白さに気付いて、スタッフがそれをサポートして、それで世の中に出ている人たちもいるだろうから。それは戦略的に生かしているって感じですかね。ただここで目指したいのは、自然とそれが何か生きてくるとか。あとは嫌な意味じゃなくて面白がれるみたいな感じ。

〔林〕

面白がるってすごく多少の困難も面白さで乗り切れるみたいな部分っていうのがあるよね。

〔茂木〕

面白がれる人が保育者になったら最強ですよ。子どももみんな面白い、他の保育者も面白いし、保護者も面白って感じられたら。これって、合う合わない、好き嫌い、とはちょっと別なのかもしれないですね。人って面白くなっていうふうになったら強いですよ。

〔五十嵐〕

うん。そうだね。人に言えるぐらいの面白さを発見し合えるというのがあったら強いですよ。なんか最初理屈じゃないような気がする

〔茂木〕

そうなんです。これは理屈じゃない。研究していると世界をどうにか理屈で整理して、やっていかなきゃいけない難しさっていうのがありますよね。

※1 社会構成主義は、個人の行動や意味は社会的文脈に依存し、相互作用によって形成されると考える社会理論。言語や文化が個人の認識や行動を構築し、社会的な相互作用が意味を生み出すとされる。

※2 第33回乳幼児教育学会シンポジウム「多様な学生を保育者として育てるための養成校の役割を考える」企画ト田真一郎（常磐会短期大学）のことを指している。

※3 茂木の長男はASDの診断を受けている。

### 3. 対談から立ち上がってきたこと

D&Iの流れのなか、保育者養成校でも学生の多様

性といったテーマが散見されるようになった。しかしながら、対談ではその多様性を問い直す試みから始まっている。私たち教員の多様性の捉え方が学生を指導するときに無自覚に影響を与えることや、学生への教授内容にかかわってくるためである。人の背景に困難があったり、違いがあったりすることを多様性と呼ぶことはたやすい。その利便性によって、頻繁に使われていくうちに、その内実がつかみにくくなってしまふという事象を対談によって三者が共有していくこととなった。

とはいえ、保育者養成の現状は、多様性とは何かを問い直すことなく、多様性の概念を定義する。例えば、インクルーシブ保育を扱うときには、多様性とは、人それぞれ異なる背景や特性をもつことを意味し、それを尊重せよと。さらに学生を指導するときにもその理念は発動し、学生の持ち味や人格そのものを認めたりする。その一方で、学生には保育士資格を取得するためにこれだけのことを達成する必要があると基準を示し示す。教員の中ではその境界を明確にもっていたとしても、評価を受け取る学生には矛盾したメッセージとして伝わっているかもしれない。“違いがあってもいいって言ってるのに！”である。このことにまず私たちは対談する中で気づいた。

では、私たちは多様な学生を、学生の多様性を、どのように捉えて、かつ受けとめて、保育者養成をしていけばいいのだろうか。保育者養成のカリキュラムでは、人の多様性について考えながら、それを受けとめ、共にそこにいることや関係を作ることを学ぶ科目はない。それでも、教員が教授するときに独自の工夫を施しており、そこに「感性」と「表現」という共通項があったことが見出された。さらに、(その人の感性や表現を)「面白い」と感じることで、人と人は繋がれるかもしれないという仮説が生まれしてきた。

人と人との関係や集団は、決してできないところを埋めて補完し、まるく収めることではない。互いの「感性」と「表現」を「面白い」と感じ、かかわりあいの中で自分たちなりの形を創造し続けることである。そのためにも「感性を磨く」ということが肝要であり、重要な概念であることが三人の対話から立ち上がってきたことである。

再度、ここで問いたい。多様性とは何か？私たちは常にそのことを問い直し、対話し続けることが求められている。そのことによって、保育者養成の新

たなアプローチを切り開いていけるのではないか。

## 引用・参考文献

- 1) ケネス・J・ガーゲン著 東村知子・鮫島輝美・久保田賢一訳『関係の世界へ：危機に瀕する私たちが生きのびる方法』ナカニシヤ出版, 2023
- 2) 平田オリザ著『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』講談社, 2012

